

与謝野晶子 訳

源氏物語

常夏卷



一冊堂青空文庫

源氏物語

常夏

紫式部

與謝野晶子訳

露置きてくれなゐいとど深けれどおも

ひ悩めるなでしこの花

(晶子)

炎暑の日に源氏は東の釣殿^{つりどの}へ出て涼んでいた。子息の中将が侍しているほかに、親しい殿上役人も数人席にいた。桂川^{かづち}の鮎^{あゆ}、加茂川^{かも}の石臥^{いしぶし}などというような魚を見る前で調理させて賞味するのであったが、例のようにまた内大臣の子息たちが中将を訪ねて来た。た。

「寂しく退屈な気がして眠かった時によくおいでになった」

と源氏は言って酒を勧めた。氷の水、水飯^{すいはん}などを若い人は皆大騒ぎして食べた。風はよく吹き通すのであるが、晴れた空が西日になるころには蝉^{せみ}の声などからも苦しい熱が

撒まかれる気がするほど暑気が堪えがたくなった。

「水の上の価値が少しもわからない暑さだ。私はこんなふうにして失礼する」

源氏はこう言つて身体からだを横たえた。

「こんなころは音楽を聞こうという気にもならないし、さてまた退屈だし、困りますね。お勤めに出る人たちはたまらないでしょうね。帯も紐ひもも解かれないのだからね。私の所だけでも几帳面きちようめんにせずに気楽なふうになって、世間話でもしたらどうですか。何か珍しいことで睡気ねむけのさめるような話はありませんか。なんだかもう老人としよりになつてしまつた気がして世間のこともまづたく知らずにいますよ」

などと源氏は言うが、新しい事実として話し出すような問題もなく、皆かしこまつたふうで、涼しい高欄に背を押しつけたまま黙つていた。

「どうしてだれが私に言ったことかも覚えていないのだが、あなたのほうの大臣がこのごろほかでお生まれになつたお嬢さんを引き取つて大事がつておいでになるということを知りましたか」

と源氏は弁べんの少将に問うた。

「そんなふうには世間でたいそうに申されるようなことでもございません。この春大臣が

夢占いをさせましたことが噂になりまして、それからひょつくりと自分は縁故のある者だと名のつて出て来ましたのを、兄の中将が真偽の調査にあたりまして、それから引き取つて来たようですが、私は細かいことをよく存じません。結局珍談の材料を世間へ呈供いたしましたことになったのでございます。大臣の尊厳がどれだけそれでそこなわれましたかしません」

少将の答えがこうであつたから、ほんとうのことだつたと源氏は思った。

「たくさんな雁かりの列から離れた一羽までもしいてお捜しになつたのが少し欲深かつたのですね。私の所などこそ、子供が少ないのだから、そんな女の子なども見つけたいのだが、私の所では気が進まないのか少しも名のつて来てくれる者が無い。しかしともかく迷惑なことだつても大臣のお嬢さんには違ひないのでしよう。若い時分は無節制に恋愛関係をお作りになつたものだからね。底のきれいでない水に映る月は曇らないであろうわけはないのだからね」

と源氏は微笑しながら言つていた。子息の左中将も真相をくわしく聞いていることであつたからこれも笑いを洩もらさないではいられなかつた。弁の少将と藤侍とうのじじまう従はつらそうであつた。

「ねえ朝臣、おまえはその落ち葉でも拾ったらいだろう。不名誉な失恋男になるより

は同じ姉妹きょうだいなのだからそれで満足をすればいいのだよ」

子息をからかうような調子で父の源氏は言うのであった。内大臣と源氏は大体は仲のよい親友なのであるが、ずっと以前から性格の相違が原因になったわずかな感情の隔たりはあったし、このごろはまた中将を侮蔑ぶべつして失恋の苦しみをさせている大臣の態度に飽き足らないものがあつて、源氏は大臣が癪しゃくにさわる放言をすると間接に聞くように言っているのである。新しい娘を迎えて失望している大臣の噂うわさを聞いても、源氏は玉鬘たまかざらのことを聞いた時に、その人はきつと大騒ぎをして大事に扱うことであろう、自尊心の強い、対象にする物の善よさ悪さで態度を鮮明にしないではいられない性質の大臣は、近ごろ引き取った娘に失望を感じている様子は想像ができるし、また突然にこの玉鬘を見せた時の歓びよろこぶりも思われないでもない、極度の珍重ぶりを見せることであろうなどと源氏は思っていた。夕べに移るころの風が涼しくて、若い公子たちは皆ここを立ち去りがたく思うふうである。

「気楽に涼んで行ったらいいでしょう。私もとうとう青年たちからけむたがられる年になった」

こう言つて、源氏は近い西の対を訪ねようとしていたから、公子たちは皆見送りをするためにいつて行つた。日の暮れ時のほの暗い光線の中では、同じような直衣姿のうしのだれがだれであるかもよくわからないのであつたが、源氏は玉鬘に、

「少し外のよく見える所まで来てごらんさい」

と言つて、従えて来た青年たちのいる方をのぞかせた。

「少将や侍従をつれて来ましたよ。ここへは走り寄りたいほどの好奇心を持つ青年たちなのだが、中将がきまじめ過ぎてつれて来ないのですよ。同情のないことですよ。この青年たちはあなたに対して無関心な者が一人もないでしょう。つまらない家の者でも娘でいる間は若い男にとつて好奇心の対象になるものだからね。私の家というものを實質以上にだれも買いかぶっているのですからね、しかも若い連中は六条院の夫人たちを恋の対象にして空想に陶醉するようなことはできないことだったのが、あなたという人ができたから皆の注意はあなたに集まることになったのです。そうした求婚者の眞実の深さ浅さというやうなものを、第三者になつて觀察するのはおもしろいことだろうと、退屈なあまりに以前からそんなことがあればいいと思つていたのがやうやく時期が来たわけです」

などと源氏はささやいていた。この前の庭には各種類の草花を混ぜて植えるようなことはせずに、美しい色をした撫子なでしこばかりを、唐撫子からなでしこ、大和撫子やまともことに優秀なのを選んで、低く作った垣かきに添えて植えてあるのが夕映ゆやばえに光って見えた。公子たちはその前を歩いて、じつと心が惹ひかれるようにたたずんだりもしていた。

「りっぱな青年官吏ばかりですよ。様子にもとりなしにも欠点は少ない。今日は見えないが右中将は年かさだけあってまた優雅さが格別ですよ。どうです、あれからのちも手紙を送ってよこしますか。軽蔑けいべつするような態度はとらないようにしなければいけない」などとも源氏は言った。すぐれたこの公子たちの中でも源中将は目だって艶えんな姿に見えた。

「中将をきらうことは内大臣として意を得ないことですよ。御自分が尊貴であればあの子も同じ兄妹きょうだいから生まれた尊貴な血筋というもののだからね。しかしあまり系統がきちんとしていて王風おうふうの点が気に入らないのですかね」

と源氏が言った。

「来まさば（おほきみ来ませ婿にせん）というような人もあすこにはあるのではございませんか」

「いや、何も婿に取られたいのではありませんがね。若い二人が作つた夢をこわしたままにして幾年も置いておかれるのは残酷だと思ふのです。まだ官位が低くて世間体がよろしくないと思われるのだったら、公然のことにはしないで私へお嬢さんを託しておかれるという形式だっていいじゃないのですか。私が責任を持てばいいはずだと思うのだが」

源氏は歎息した。自分の実父との間にはこうした感情の疎隔があるのかと玉鬘ははじめて知った。これが支障になつて親に逢いうる日がまだはるかなことに思わねばならないのであるかと悲しくも思い、苦しくも思つた。月がないころであつたから燈籠に灯がともされた。

「灯が近すぎて暑苦しい、これよりは篝がよい」

と言つて、

「篝を一つこの庭で焚くように」

と源氏は命じた。よい和琴がそこに出ているのを見つけて、引き寄せて、鳴らしてみると律の調子に合わせてあつた。よい音もする琴であつたから少し源氏は弾いて、

「こんなほうのことには趣味を持つていられないのかと、失礼な推測をしましたよ。」

秋の涼しい月夜などに、虫の声に合わせるほどの気持ちでこれの弾かれるのははなやかでいいものです。これはもったいらしく弾く性質の楽器ではないのですが、不思議な楽器で、すべての楽器の基調になる音を持つている物はこれなのです。簡単にやまと琴という名をつけられながら無限の深味のあるものですね。ほかの楽器の扱いにくい女の人のために作られた物の気がします。おやりになるのならほかの物に合わせて熱心に練習なさい。むずかしいことがないような物で、さてこれに妙技を現わすということはむずかしいといったような楽器です。現在では内大臣が第一の名手です。ただ清掻^{すが}きをされるのにもあらゆる楽器の音を含んだ声が立ちますよ」

と源氏は言った。玉鬘もそのことはかねてから聞いて知っていた。どうかして父の大臣の爪音^{つまおと}に接したいとは以前から願っていたことで、あこがれていた心が今また大きな衝動を受けたのである。

「こちらにおりまして、音楽のお遊びがございます時などに聞くことができますでしょう。田舎^{いなか}の人などもこれはよく習っておりますから、気楽に稽古^{けいこ}ができますもののように私は思っていたのでございますがほんとうの上手^{じょうず}な人の弾くのは違っているのでございますね」

玉鬘は熱心なふうに見えた。

「そうですよ。あずま琴などとも言つてね、その名前だけでも輕蔑けいべつしてつけられている琴のようですが、宮中の御遊ぎょゆうの時に図書の役人に樂器の搬入を命ぜられるのにも、ほかの国は知りませんがここではまず大和琴やまとが真先まっさきに言われます。つまりあらゆる樂器の親にこれがされているわけです。弾くことは練習次第で上達しますが、お父さんに同じ音樂的の遺伝のある娘がお習いすることは理想的ですね。私の家などへも何かの場合においでにならないことはありませんが、精いっぱい弾かれるのを聞くことなどは困難でしょう。名人の芸というものはなかなか容易に全部を見せようとしませんからね。しかしあなたはいつか聞けますよ」

こう言いながら源氏は少し弾いた。はなやかな音であつた。これ以上な音が父には出るであろうかと玉鬘たまかみは不思議な気もしながらますます父にあこがれた。ただ一つの和琴わこんの音だけでも、いつの日に自分は娘のために打ち解けて弾いてくれる父親の爪音つめおとにあることができるのであらうと玉鬘はみずからをあわれんだ。「貫川ぬきがはの瀬々せぜのやはらだ」(やはらたまくらやはらかに寝る夜はなくて親さくる妻)となつかしい声で源氏は歌っていたが「親さくる妻」は少し笑いながら歌い終わったあとの清搔すががきが非常におもしろ

く聞かれた。

「さあ弾いてごらんさい。芸事は人に恥じていては進歩しないものですよ。『想夫恋^{れん}』だけはきまりが悪いかもしれませんがね。とにかくだれとでもつとめて合わせるのがいいのですよ」

源氏は玉鬘の弾くことを熱心に勧めるのであったが、九州の田舎で、京の人であることを標榜^{ひょうぼう}していた王族の端くれのような人から教えられただけの稽古^{けいこ}であったから、まちがってはいはと気恥ずかしく思つて玉鬘は手を出そうとしないのであった。源氏が弾くのを少し長く聞いていれば得る所があるであろう、少しでも多く弾いてほしいと思う玉鬘であつた。いつとなく源氏のほうへ膝行^{いざ}り寄つていた。

「不思議な風が出てきて琴の音響^{ひびき}を引き立てている気がします。どうしたのでしょうか」

と首を傾けている玉鬘の様子が灯^ひの明りに美しく見えた。源氏は笑いながら、「熱心に聞いていてくれない人には、外から身にしむ風も吹いてくるでしょう」

と言つて、源氏は和琴を押しやってしまった。玉鬘は失望に似たようなものを覺えた。女房たちが近い所に来ていたので、例のような戯談^{じやうだん}も源氏は言えなかつた。

「撫子^{なでしこ}を十分に見ないで青年たちは行つてしまいましたね。どうかして大臣にもこの花

壇をお見せしたいものですよ。無常の世なのだから、すべきことはすみやかにしなければいけない。昔大臣が話のついでにあなたの話をされたのも今のこのような気もします」

源氏はその時の大臣の言葉を思い出して語った。玉鬘は悲しい気持ちになっていた。

「なでしこの常なつかしき色を見ばもとの垣根を人や尋ねん

私にはあなたのお母さんのことで、やましい点があつて、それでつい報告してあげることが遅れてしまうのです」

と源氏は言った。玉鬘は泣いて、

山がつの垣ほに生ひし撫子のもとの根ざしをたれか尋ねん

とはかないふうに言つてしまふ様子が若々しくなつかしいものに思われた。源氏の心はますますこの人へ惹かれるばかりであつた。苦しいほどにも恋しくなつた。源氏とは

うていこの恋心は抑制してしまうことのできるものでないと知った。

たまかすら

玉鬘たまかすらの西の対への訪問があまりに続いて人目を引きそうに思われる時は、源氏も心の鬼にとがめられて間は置くが、そんな時には何かと用事らしいことをこしらえて手紙が送られるのである。この人のことだけが毎日の心にかかっている源氏であった。なぜよいけないことをし始めて物思いを自分はするのであらう、煩悶はんもんなどはせずに感情のままに行動することになれば、世間の批難は免れないであらうが、それも自分はよいとして女のために気の毒である。どんなに深く愛しても春の女王にょおうと同じだけにその人を思うことの不可能であることは、自分ながらも明らかに知っている。第二の妻であることによつて幸福があらうとは思われない。自分だけはこの世のすぐれた存在であつても、自分の幾人もの妻の中の一人である女に名誉のあるわけではない。平凡な納言級の人の唯一の妻になるよりも決して女のために幸福でないと源氏は知っているのであつたから、しいて情人にするのが哀れで、兵部卿ひょうぶけいの宮か右大将に結婚を許そうか、そうして良人おとこの家へ行つてしまえばこの悩ましさから自分は救われるかもしれない。消極的な考えではあるがその方法を取らうかと思う時もあった。しかもまた西の対へ行つて美しい玉鬘を見たり、このごろは琴を教へてもいたので、以前よりも近々と寄つたりしては決心していた

ことが揺ゆいでもしうのであつた。玉鬘もこうしたふうに源氏が扱あひ始めたころは、恐ろしい気もし、反感を持つたが、それ以上のことはなくて、やはり信頼のできそうなのに安心して、しいて源氏の愛撫あいぶからのがれようとはしなかつた。返辞などもなれなれしくならぬ程度にする愛嬌あいきようの多さは知らず知らずに十分の魅力になつて、前の考えなどは合理的なものでないと源氏をして思わせた。それでは今のままに自分の手もとへ置いて結婚ちゆうこんをさせることにしよう、そして自分の恋人にもしておこう、処女である点が自分に躊躇ちゆうちよをさせるのであるが、結婚をしたのちもこの人に深い愛をもつて臨めば、良人おととのあることなどは問題でなく恋は成り立つに違ちがひないといふこんなけしからぬことも源氏は思つた。それを実行した暁にはいよいよ深い煩悶はんもんに源氏は陥ることであらうし、熱烈でない愛しようはできない性質でもあるから悲劇がそこに起こりそうな氣のすることである。

内大臣が娘だと名のつて出た女を、直ちに自邸へ引き取つた処置について、家族も家司したちもそれを軽率だと言っていること、世間でも誤つたしかただと言っていることも皆大臣の耳にははいつていたが、弁べんの少将が話のついでに源氏からそんなことがあるかと聞かれたことを言い出した時に大臣は笑つて言つた。

「そうだ、あすこにも今まで噂うわさも聞いたことのない外腹の令嬢ができて、それをたいそ

うに扱っていられるではないか。あまりに他人のことを言わない大臣だが、不思議に私の家のことだと口の悪い批評をされる。このことなどはそれを証明するものだよ」

「あちらの西の対の姫君はあまり欠点もない人らしゅうございます。兵部卿ひょうぶきやうの宮などは熱心に結婚したがっていらっしゃるのですから、平凡な令嬢でないことが想像されると世間でも言っております」

「さあそれがね、源氏の大臣の令嬢である点でだけありがたく思われるのだよ。世間の人心というものは皆それなのだ。必ずしも優秀な姫君ではなからう。相当な母親から生まれた人であれば以前から人が聞いているはずだよ。円満な幸福を持つていられる方だが、りっぱな夫人から生まれた令嬢あかしが一人もないのと思うと、だいたい子供が少なかったんだね。劣り腹あかしといって明石の女の生んだ人は、不思議な因縁で生まれたということだけでも何となく未来の好運が想像されるがね。新しい令嬢はどうかすれば、それは実子でないかもしれない。そんな常識で考えられないようなこともあの人にはされるのだよ」

と内大臣は玉鬘たまかすらをけなした。

「それにしても、だれが婿に決まるのだろう。兵部卿の宮の御熱心が結局勝利を占めら

れることになるのだろう。もともと特別にお仲がいいのだし、大臣の趣味とよく一致した風流人だからね」

と言ったあとに大臣は雲井くもいの雁かりのことを残念に思った。そうしたふうになれと結婚をするかと世間に興味を持たせる娘に仕立てそこねたのがくやしいのである。これによつても中将が今一段光彩のある官に上らない間は結婚が許されないと大臣は思った。源氏がその問題の中へはいつて来て懇請することがあれば、やむをえず負けた形式で同意をしようという大臣の腹であつたが、中将のほうでは少しも焦慮しやうりょするふうを見せず落ち着いているのであつたからしかたがないのである。こんなことをいろいろと考えていた大臣は突然行つて見たい氣になつて雲井の雁の居間を訪ねた。少将も供をして行つた。雲井の雁はちようど昼寝をしていた。薄物の単衣ひとえを着て横たわつてゐる姿からは暑い感じを受けなかつた。可憐かれんな小柄な姫君である。薄物に透いて見える肌はだの色がきれいであつた。美しい手つきをして扇を持ちながらその肱ひじを枕まくらにしていた。横にたまつた髪はそれほど長くも、多くもないが、端のほうが感じよく美しく見えた。女房たちも几帳きちようの蔭かげなどにはいつて昼寝をしている時であつたから、大臣の来たことをまだ姫君は知らない。扇を父が鳴らす音に何げなく上を見上げた顔つきが可憐で、頬ほおの赤くなつてゐるのなど

も親の目には非常に美しいものに見られた。

「うたた寝はいけないことなのに、なぜこんなふうな寝方をしてましたか。女房なども近くに付いていないでけしからんことだ。女というものは始終自身を護る^{まも}心がなければいけない。自分自身を打ちやりしているようなふうの見えることは品の悪いものだ。賢そうに不動の陀羅尼^{だらに}を読んで印を組んでいるようなのも憎らしいがね。それは極端な例だが、普通の人でも少しも人と接触をせずに奥に引き入ってばかりいるようなことも、気高^{けだか}いようでまたあまり感じのいいものではない。太政大臣が未来のお后^{きさき}の姫君を教育していられる方針は、いろんなことに通じさせて、しかも目だつほど専門的に一つのことを深くやらせまい、そしてまたわからないことは何も無いようにということであるらしい。それはもつともなことだが、人間にはそれぞれの天分があるし、特に好きなこともあるのだから、何かの特色が自然出てくることだろうと思われる。大人^{おとな}になつて宮廷へはいられるころはたいしたものだろうと予想される」

などと大臣は娘に言っていたが、

「あなたをこうしてあげたいといういろいろ思っていたことは空想になつてしまつたが、私はそれでもあなたを世間から笑われる人にはしたくないと、よその人のいろいろの話を

聞くごとにあなたのことを思つて煩悶する。ためそうとするだけで、表面的な好意を寄せるような男に動揺させられるようなことがあつてはいけませんよ。私は一つの考えがあるのだから」

ともかわいく思いながら訓めもした。昔は何も深く考えることができずに、あの騒ぎのあつた時も恥知らずに平気で父に対していたと思ひ出すだけでも胸がふさがるように雲井の雁は思った。大宮の所からは始終逢いたいというふうにお手紙が来るのであるが、大臣が氣にかけていることを思うと、御訪問も容易にできないのである。

大臣は北の対に住ませである令嬢をどうすればよいか、よけいなことをして引き取つたあとで、また人が譏るからといって家へ送り歸すのも軽率な氣のすることであるが、娘らしくさせておいては満足しているらしく自分の心持が誤解されることになつていやである、女御の所へ来させることにして、馬鹿娘として人中に置くことにさせよう、悪い容貌だというのがそう見苦しい顔でもないのであるからと思つて、大臣は女御に、

「あの娘をあなたの所へよこすことにしよう。悪いことは年のいった女房などに遠慮なく矯正させて使つてください。若い女房などが何を言つてもあなただけはいつしよになつて笑うようなことをしないでお置きなさい。輕佻に見えることだから」

と笑いながら言った。

「だれがどう言いまして、そんなつまらない人ではきつとないと思います。中将の兄様などの非常な期待に添わなかったというだけでしよう。こちらへ来ましてからいろんな取り沙汰などをされて、一つはそれでのぼせて粗相そそうなこともするのでございましょう」

と女御は貴女きじよらしい品のある様子で言っていた。この人は一つ一つ取り立てて美しいということのできない顔で、そして品よく澄み切った美の備わった、美しい梅の半ば開いた花を朝の光に見るような奥ゆかしさを見せて微笑しているのを大臣は満足して見た。だれよりもすぐれた娘であると感じたのである。

「しかしなんといつても中将の無経験がさせた失敗だ」

などとも父に言われている新令嬢は気の毒である。大臣は女房を訪ねた帰りにその人の所へも行つて見た。

座敷の御簾みすをいっぱいに張り出すようにして裾すそをおさえた中で、五節ごせちという生意気な若い女房と令嬢は双六すじろくを打っていた。

「しょうさい、しょうさい」

と両手をすりすり賽さいを撒まく時の呪文じゅもんを早口に唱えているのに悪感おかんを覚えながらも大臣は従って来た人たちの人払いの声を手で制して、なおも妻戸の細目に開いた隙すきから、障子の向こうを大臣はのぞいていた。五節も蓮葉はすつばらしく騒いでいた。

「御返報しますよ。御返報しますよ」

賽の筒を手でひねりながらすぐには撒こうとしない。姫君の容貌は、ちょっと人好きのする愛嬌あいぎょうのある顔で、髪もきれいであるが、額の狭いのと頓狂とんきやうな声とにそこなわれている女である。美人ではないがこの娘の顔に、鏡で知っている自身の顔と共通したもののあるのを見て、大臣は運にのろわれている気がした。

「こちらで暮らすようになって、あなたに何か気に入らないことがありますか。つい忙しくて訪ねたずに来ることも十分できないが」

と大臣が言うと、例の調子で新令嬢は言う。

「こうしていられますことに何の不足があるものでございますか。長い間お目にかかりたいと念がけておりましたお顔を、始終拝見できませんことだけは成功したものとは思われませんが」

「そうだ、私もそばで手足の代わりに使う者もあまりないのだから、あなたが来たらそ

んな用でもしてもらおうかと思つていたが、やはりそうはいかないものだからね。ただの女房たちというものは、多少の身分の高下はあつても、皆いつしよに用事をしていては目だたずに済んで気安いもののだが、それでもだれの娘、だれの子ということが知られているほどの身の上の者は、親兄弟の名誉を傷つけるようなことも自然起こつてきてもおもしろくないものだろうが、まして」

言いさして話をやめた父の自尊心などに令嬢は頓着していなかった。

「いいえ、かまいませんとも、令嬢などと思召さないで、女房たちの一人としてお使いくださいまし。お便器のほうのお仕事だつて私はさせていただきます」

「それはあまりに不似合いな役でしょう。たまたま巡り合つた親に孝行をしてくれる心があれば、その物言いを少し静かにして聞かせてください。それができれば私の命も延びるだろう」

道化たことを言うのも好きな大臣は笑いながら言つていた。

「私の舌の性質がそうなんです。小さい時にも母が心配しましてよく訓戒されました。妙法寺の別当の坊様が私の生まれる時産屋うぶやにいたのですつてね。その方にあやかつたのだと言つて母が歎息たんそくしておりました。どうかして直したいと思つております」

むきになつてこう言うのを聞いても孝心はある娘であると大臣は思った。

「産屋^{うぶや}などへそんなお坊さんの来られたのが災難なんだね。そのお坊さんの持つている罪の報いに違いないよ。唾^{おし}と吃^{どもり}は仏教を譏^{そし}つた者の報いに数えられてあるからね」

と大臣は言っていたが、子ながらも畏敬^{いけい}の心の湧^わく女御^{にょご}の所へこの娘をやることは恥ずかしい、どうしてこんな欠陥の多い者を家へ引き取ったのであろう、人中へ出せばいよいよ悪評がそれからそれへ伝えられる結果を生むではないかと思つて、大臣は計画を捨てる氣にもなつたのであるが、また、

「女御^{うち}が家へ歸つておいでになる間に、あなたは時々あちらへ行つて、いろんなことを見習うがよいと思う。平凡な人間も貴女^{きじよ}がたの作法^{えとく}に会得^{えとく}が行くと違つてくるものだからね。そんなつもりであちらへ行こうと思ひますか」

とも言つた。

「まあうれしい。私はどうかして皆さんから兄弟だと認めていただきたくと寝ても醒^さめても祈つていたのでございますからね。そのほかのことはどうでもいいと思つていたくらいでございますからね。お許しさえございましたら女御^{にょご}さんのために私は水を汲^くんだり運んだりしましてもお仕えいたします」

なお早口にしゃべり続けるのを聞いていて大臣はますます憂鬱ゆううつな気分になるのを、紛らすために言った。

「そんな労働などはしなくてもいいがお行きなさい。あやかったお坊さんはなるべく遠方のほうへやっておいてね」

滑稽こっけい扱いにして言っているとも令嬢は知らない。また同じ大臣といつても、きれいで、物々しい風采ふうさいを備えた、りっぱな中のりっぱな大臣で、だれも気おくれを感じるほどの父であることも令嬢は知らない。

「それではいつ女御さんの所へ参りましょう」

「そう、吉日でなければならぬかね。なにいいよ、そんなたいそうなふうには考えずに、行こうと思えば今日にでも」

言い捨てて大臣は出て行った。四位五位の官人が多くあとに従った、権勢の強さの思われる父君を見送っていた令嬢は言う。

「ごりっぱなお父様なこと、あんな方の種なんだのに、ずいぶん小さい家で育ったものだ私は」

五節ごせちは横から、

「でもあまりおいばりになりすぎますわ、もつと御自分はよくなくても、ほんとうに愛してくださるようなお父様に引き取られていらっしやればよかった」

と言った。真理がありそうである。

「まああんた、ぶちこわしを言うのね。失礼だわ。私と自分とを同じように言うようなことはよしてくださいよ。私はあなたなどとは違った者なのだから」

腹をたてて言う令嬢の顔つきに愛嬌あいせうがあつて、ふざけたふうな姿が可憐かれんでないこともなかった。ただきわめて下層の家で育てられた人であつたから、ものの言いようを知らないのである。何でもない言葉もゆるく落ち着いて言えば聞き手はよいことのように聞くであろうし、巧妙でない歌を話に入れて言う時も、声づかいをよくして、初め終わりをよく聞けないほどにして言えば、作の善悪を批判する余裕のないその場ではおもしろいことのようにも受け取られるのである。強々こわこわしく非音楽的な言い方をすれば善いことも悪く思われる。乳母めのとの懐育ふくちのまま、何の教養も加えられてない新令嬢の真価は外観から誤られもするのである。そう頭が悪いのでもなかった。三十一字の初めと終わりの一貫してないような歌を早く作って見せるくらいの才もあるのである。

「女御さんの所へ行けとお言いになったのだから、私がしぶしぶにして気が進まないふ

うに見えては感情をお害しになるだろう。私は今夜のうちに çık かけることにする。大臣がいらっしやっても女御さんなどから冷淡にされてはこの家で立つて行きようがないじゃないか」

と令嬢は言つていた。自信のなさが氣の毒である。手紙を先に書いた。

葦垣のまぢかきほどに侍らひながら、今まで影踏むばかりのしるしも侍らぬは、なこその関をや据ゑさせ給ひつらんとなん。知らねども武蔵野といへばかしこけれど、あなかしこやかしこや。

点の多い書き方で、裏にはまた、

まことや、暮れにも参りこむと思ひ給へ立つは、厭ふにはゆるにや侍らん。いでや、いでや、怪しきはみなせ川にを。

と書かれ、端のほうに歌もあつた。

草若みひたちの海のいかが崎いかで相見む田子の浦波

大川水の（みよし野の大川水のゆほびかに思ふものゆゑ浪の立つらん）

青い色紙一重ねに漢字がちに書かれてあった。肩がいかつて、しかも漂って見えるほど力のない字、しという字を長く氣どつて書いてある。一行一行が曲がつて倒れそうな自身の字を、満足そうに令嬢は微笑して読み返したあとで、さすがに細く小さく巻いて撫子の花へつけたのであった。かわや。廁係りの童女はきれいな子で、奉公なれた新参者であるが、それが使いになつて、女御の台盤所だいばんじょうへそつと行つて、

「これを差し上げてください」

と言つて出した。下仕えしもつかの女が顔を知つていて、北の対に使われている女の子だといつて、撫子を受け取つた。大輔たゆうという女房が女御の所へ持つて出て、手紙をあけて見せた。女御は微笑をしながら下へ置いた手紙を、中納言という女房がそばにいて少し読んだ。

「何でございますか、新しい書き方のお手紙のようでございますね」

となお見たそうに言うのを聞いて、女御は、

「漢字は見つけないせいかしら、前後が一貫してないように私などには思われる手紙よ」

と言いながら渡した。

「返事もそんなふうにたいそうに書かないでは低級だと言って軽蔑けいべつされるだろうね。それを讀んだついでにあなたから書いておやりよ」

と女御は言うのであった。露骨に笑い声はたてないが若い女房は皆笑っていた。使いが返事を請求していると言ってきた。

「風流なお言葉ばかりでできているお手紙ですから、お返事はむずかしゅうございます。仰せはこうこうと書いて差し上げるのも失礼ですし」

と言つて、中納言は女御の手紙のようにして書いた。

近きしるしなきおぼつかなさは恨めしく、

ひたちなる駿河するがの海の須磨すまの浦に浪立ちいでよ箱崎はこざきの松

中納言が讀むのを聞いて女御は、

「そんなこと、私が言つたように人が皆思うだろうから」

と言つて困つたような顔をしていると、

「大丈夫でございますよ。聞いた人が判断いたしますよ」

と中納言は言つて、そのまま包んで出した。新令嬢はそれを見て、

「うまいお歌だこと、まつとお言いになったのだから」

と言つて、甘いにおいの薫香くんこうを熱心に着物へ焚たき込んでいた。紅べにを赤々とつけて、髪をきれいなでつけた姿にはにぎやかな愛嬌あいぎやうがあつた、女御との会談にどんな失態をすることか。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡いただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
